

本末・檀家制度の登場とその歴史的意义

石山十年戦争によって全国ネットの本願寺真宗勢力は壊滅した。しかし、生活の中で南無阿弥陀仏によって信心に目覚めた民衆の心性は場所と時間を越えて受け継がれていく。この事実を秀吉も家康も見逃さなかったはずだ。彼らが民衆を統治するシステムを築くにあたって、古代の政権が果たせなかった移動民の統治を可能にするヒントをここに見て取った。近世に展開する本末関係・寺檀制度のはじまりである。

この時以来、門徒のみならずすべての人民が特定の寺院に檀徒として所属を義務づけられた。個



亀山御坊本徳寺大門と五条築地

1582年、秀吉の町内寺の化の五十七の

人の宗教は檀家寺の監視下におかれ、寺は権力から与えられた宗判権により、檀徒個人の信仰を判別し認定する職務を課せられたのである。所謂、寺請制度である。

この制度の背景には、本願寺の解体にともなうて急激に信徒数を増やしたキリスト教の勢力が関係する。秀吉も当初は民の信仰に寛容であったが、キリスト教徒による寺院の破壊や教会の土地所有などが進むにつれて、為政者は国家的な脅威を感じとった。実際、イエズス会の使命的な宣教活動は、当時のヨーロッパ、とりわけスペイン、イスパニアの植民地争奪の先兵としての役割を担っていた。

このような事情を背景に、バテレン禁止令は出され、この禁令の徹底した執行に当たって、檀家制度は機能したのである。

禁教令によって、ある地方ではキリスト教徒が強制的に真宗に転籍させられた。中世より、真宗以外の檀徒は葬式・法事を寺院の住職に依頼することが常態化しており、転入した真宗檀徒がキリスト教でないことを自ら明かすために積極的に葬儀・法事を檀家寺に依頼した事実がある。

以前は、門徒の葬儀は地域の習慣にしたがい、同行の長老が取り仕切って行われ、寺の主要な役務ではなかった。これのみが真宗寺院が葬式・法事を担うようになった原因でないが、少なくとも近世の寺檀関係において葬式・法事を執り行う一因となったことは事実である。

この時期から、門徒と運命共同体であった真宗の寺内町体制は解体され、門徒と寺は構造的に分離され、寺は門徒を檀徒として管理するよう

になったことはいうまでもない。檀家寺の誕生である。

しかも、明治になって本末関係・寺檀制度が廃止されたにもかかわらず、これが連続と現在まで続いていることは便宜的な統治システムの側面だけではなく、この制度を支える本質を理解する必要がある。

本徳寺も英賀から亀山へ移設され、檀家寺を統治するシステムの一翼を担うことになる。しかし、寺の構造は以前とは全く異なる。院家の象徴である五本線の立派な築地塀、役瓦に栄える菊紋と桐紋がそのなんたるかを語っているようだ。門徒と寺を切り離し、重層な築地で信仰もろとも封じ込めたように思うのは私だけだろうか。

これを機会に、一神教と仏教の信徒の信仰について言及しておきたい。

専念宗・本願寺の解体とキリスト教信徒の増加の間には明らかに相関がある。因果関係は明確ではないが、この両者には一見共通する特性がある。普遍的個人の創出である。具体的にはイエ・ムラ・クニという世俗の秩序から解放された普遍的な存在の自覚である。だから両者は民族を越え、国を超えて伝えられていく。

しかし、この普遍性に両者の決定的な違いがある。一神教はあくまでも創造主と被造者との契約によって、もつと言えば原罪を負う者が神の愛（アガペー）を受入れることによって、世俗的な人間関係を断ち切って普遍的な個人が成立する。一方、阿弥陀教は仏の大慈悲心によって人と人の関係を成就する過程を経て関係性の中に自らの役分を自覚する自発的な個人が成立するのである。